

「米とくらし」

森 行人

みなとびあでは、第五回むかしのくらし展「米とくらし」を二月一日(日)まで開催中です。

新潟市域は、越後平野の中央、平野を貫流する信濃川の最下流部に立地します。現在の市域には、整然と区画された美田が広がっています。しかし、大規模な排水施設が整う以前は、大小の水路が交錯し、潟が点在する低湿な土地でした。平坦な地形のために、年中水がたまりやすく、こうした深田に農家は毎年土を入れて土かさを上げて、田の収穫を維持していました。

今回の展覧会では、当時の農業で用されていた道具をできるだけたくさん集めて展示しています。深田の作業に不可欠な道具をはじめ、昭和初期ごろに市域で使われた農具など約一六〇点を展示しています。中には現在の稲作からは想像もできない道具があります。キツォはその代表です。

キツォは田で使う舟で、深田で収穫した稲を載せて押ししたり、ひいたりして運びました。水がたまった田での稲の輸送にキツォは欠かせない道具でした。同じく深田での稲刈りで使うカシキ、葦原をひらいて新田を作る時に使うヤチキリガマ、ほかにもセンバや土臼など、江戸時代から使われてきた数多くの道具を展示しています。また、

手回し脱穀機や近代唐箕、除草機のように、鉄の歯車を組み込んだ、明治以降に開発された農機具も展示しています。

こうした網羅的な資料展示を、当館所蔵の資料だけで行うことは困難です。そこで、資料を市域の博物館や資料館などから借用して展示しました。

中でも湿田農業に特有な資料は、できるだけ複数の資料を展示するようにしました。たとえば、複数の区で使われたカシキを並べて展示すると、カシキを使う農業やその基盤となる風土が市域で共通性を持つことがひと目でわかります。一方で、西区や西蒲区の施設が保存する高台状のダイカンジキ・ハコカンジキという資料を展示しましたが、同種の道具にバリエーションがあることは、共通性の中の個性です。市内各区の諸施設が保存している資料を借用し、並べて見比べると、各地の個性に気づくこともできます。

今回の展覧会では、同種の資料をできるだけたくさん集めた「特集展示」も行いました。市域で使われた唐箕を全部で三三台集めた展示です。唐箕は稲作の脱穀調整作業で、モミとワラクズ、玄米とモミガラ等を選別する道具です。江戸時代後期には市域でも使

用されるようになり、近代に入ると米作りに欠かせない道具として各農家に普及しました。

一三三台の唐箕は、半数は当館所蔵資料、後の半数は各区の施設の資料を借用したものです。現在、市の施設全体では六〇台以上の唐箕を保存しています。数が三三台となったのは展示室の面積の都合ですが、これだけ多く集めて見比べると実に多くのことを発見できます。

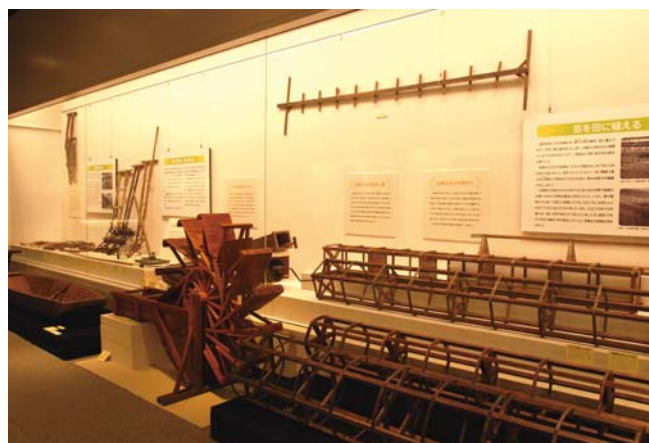
まず古い資料が含まれています。最も古い唐箕は文久元(一八六二)年、約一五〇年前のもので、この江戸時代から明治・大正・昭和と、各時代の唐箕を見比べると、形態や仕組みの違いがあることに気づきます。この違いから、製作技術の進化や使用する側の作業の効率化への志向を読み取ることができます。

また、実は三三台の中には、ほぼ同じ形をした唐箕が含まれています。これは極めて興味深いことです。たとえば、前述の江戸時代の唐箕には「巻請合(職人名)」との墨書がありました。鑑濁周辺の各施設には、職人名は異なるものの、同じ型で「巻請合」と書かれた唐箕が保存されていました。西蒲区巻には複数の唐箕作りの職人がいて、江戸時代末から明治まで活動してい

たこと、巻の唐箕を鑑濁周辺の農家が買い求めていたことを教えてくれます。

より広い範囲の資料を並べて見比べることで、資料情報が一層広く深く見えてくることを改めて実感しました。新市域全体の共通性と各区の個性を、ともに地域の歴史として再発見し、地域像を豊かに構築していく上で、各区が伝えている資料が、各区にとっても新潟市全体にとっても重要であることがわかります。

(もり ゆきひと 学芸員)



常設展示室から — ヤツメツツ(ヤツメドウ) —

信濃川、阿賀野川の河口では江戸時代からヤツメウナギ漁が盛んに行われていました。ヤツメウナギは、ウナギに似た姿をした生き物で、生物学では魚類とは異なる無顎類に属する脊椎動物として知られています。ビタミンAを大量に含んでいて、古くから眼の病によい食べ物として好まれていました。

新潟市域では、ヤツメウナギを獲る漁法として、網漁とならんで釜漁が行われていました。釜という漁具の歴史は古く、縄文時代から使われていたことが分かっています。内部に返しがある構造の漁具で、生き物がいったん入ると抜け出せなくなってしまう仕組みになっています。新潟市周辺でポピュラーだった釜漁には、ドジョウを獲るために田んぼの脇の水路にしかけた「ドジョウツツ(泥鰯筒)」などがあります。ドジョウも新潟市域の名産品で、「亀田泥鰯」などは、大正～昭和初期の最盛期には日本各地へむけて専用列車が編成されるほど獲られていました。

信濃川の河口のヤツメウナギ漁では、釜としては巨大な「ヤツメツツ(八目筒、ヤツメドウともいった)」を使った漁が盛んに行われていました。ヤツメウナギの漁は秋の終わりから冬に行われ、ヨシ(カヤ)で作ったヤツメツツを、縄で縛って5～10個くらい連結させ川底に沈めておく漁法でした。ヤツメウナギは夜行性のため、夜の間に掛けておいて朝あげに行きました。獲ったヤツメウナギは生のまま売のほか、干したものが機織りの盛んだった信州の松本(長野県)、上州の高崎(群馬県)などの地方で売れたそうです。これはヤツメウナギが目によく、とくに「寒の日の日」に獲れた

ものは、機の上へぶら下げておいてもきき目があるという俗信があったためだそうです。

初代萬代橋の写真の橋桁のところに引き上げられたヤツメツツがたくさん写っていたり、佐渡へ渡った江戸時代の地理学者、小泉蒼軒が、佐渡の水津湊から新潟湊へ帰る際に、信濃川河口でヤツメ漁の浮子として使われていた樽をみたことを記録していたり、新潟の湊について資料調査を行っているところ意外なところでヤツメウナギ漁に出会うことがあります。

新潟市域の漁業については、展示室後半の「蒲原平野の村々」のエリアにコーナーを設けてあります。あまりひろいコーナーではありませんが、今回紹介した釜をつかった漁の外に、浜の地曳網やネズラ下駄漁なども紹介していますので、ご覧になってください。

(岩野 邦康 学芸員)



左の大きな筒がヤツメツツ

おすすめの1冊

『市民の考古学5 倭国大乱と日本海』

甘粕 健編 同成社
二〇〇八年十月

みなとびあの「館長講座」が本になりました。

当館の館長講座は、甘粕館長自らがコーディネートする全四回の連続講演会です。本書は、「日本海域における弥生の戦乱と古墳の出現」をテーマに、二〇〇七年三月に開催した同講座の記録集です。弥生時代後期から古墳時代前期に至る激動の時代、日本海域で覇を競った出雲・丹波・越等の諸勢力の交流と興亡の軌跡を考古学の成果から明らかにすることを目的に開催した当講座では、それぞれの地域ごとに島根大学教授の渡辺貞幸氏、五條文化博物館館長(当時)の石部正志氏、金沢学院大学名誉教授の橋本澄夫氏、そして当館甘粕館長が講座を担当しました。

本になるきっかけは、熱心な受講生である渡辺知夫さんが自主的に録音とテープ起こしをしてくれたことにあります。あらためて感謝いたします。

本書は市民を対象にした講座の記録であり、わかりやすくまとまっています。ぜひ、「読」ください。当館でも販売しております。

(小林 隆幸 学芸員)

